

人の家にうゑたりける桜の花さきはじめてたりける  
をみてよめる

つらゆき

四九 ことしより春知りそむる桜花 ちるといふ事は  
はならはざらなん

【校異】

○うゑたりける―はべりける(元・筋) ○桜の花―さ  
くらののはなの(六)―さくらの(基・元・筋・六)―  
「むめ」ノ傍ニ「さくら」(公) ○花さきはじめてたりけ  
るを―はじめてはなさきたりけるを(公) ○よめる―  
よみける(関)―ナシ(元・筋) ○つらゆき―紀貫之  
(公) ○ちるといふ―ちるてふ(善・筋・元・関・  
公・静・高)

【他出】

・新撰和歌 三七  
・古今六帖 第六「梅」四二二九③「梅の花」

【語釈】

○人の家にうゑたりける  
・自分の家ではないという意味で特に断ったのであ  
ろうが、「人の家に自分が植えた」とも解し得る。  
また「人家」の直訳かもしれない。(全評釈)

○桜の花さきはじめてたりける

・「さきはじめ」の「はじめ」は題詞に用いられ、歌  
の中では「そむ」が用いられる。(新全集)

・その若木の桜が初めて花を開いたのである。(全評  
釈)

○春知りそむる

・花が咲きはじめる意。桜を擬人化している。(新全  
集)

・花にも心があるものとしていう。(新大系)

・「春知りそむる」は、「春」を花の咲く時として、  
咲く事を覚え初めた意。詞書の「咲きはじめ」の  
意を言いかえたもの。この言いかえは、桜を擬人  
して、頑是ない者の物ごころのつき初めた意を持  
たせたもの。(評釈)

○桜花

・擬人の上から呼びかけとなっている。(評釈)  
○ちるといふ事は

・「は」は、上の「春知りそむる」に対させたもの。  
(評釈)

○ならはざらなむ

・「ならふ」は他に見習う意。「なむ」は、他に対し  
て願望望む意を表す終助詞。見習わないでほしい  
ものだ。(新全集)

・桜は散るものとして捉えられていた。しかし、こ  
の若木の桜に限っては「散る」という桜の本性に  
習熟しないでほしいと言っているのである。「なら  
ふ」は「習熟する」「慣れる」。「なむ」は未然形に  
ついて「…してほしい」の意。(全評釈)

・「ならふ」は、他をまねぶ意。「散るといふ事」も、  
「春知りそむる」と同じく、まねぶ事によって覚  
えるものとしていつている。「ざらなむ」は、ずあ  
ってほしいの意。(評釈)

【通釈】

ある人の家に植えてあった桜が初めて咲いた  
のを見て詠んだ歌 づらゆき

今年初めて春に咲くことを知った桜の花よ、散る  
ということでは、どうか他の桜を見習わないでくれ  
よ。

題しらず

よみ人しらず

五〇 山たかみ人もすさめぬさくら花 いたくなわ  
びそ我みはやさむ

又は、「里遠み人もすさめぬ山ざくら」

【校異】

○山たかみ―里とほみ(元・筋)―山かくれ(公) ○い  
たくなわびそ―ものなおもひそ(善・基・六・永・  
前・天・伏・経イ)〔左注〕―ナシ(公)

【他出】

・猿丸集 三三二(詞書)「山寺にまかりけるに、桜のさ  
きけるを見てよめる」

【語釈】

○山たかみ  
・山が高いので。(新全集)  
・山が高くして。(評釈)  
・庭前に植えることの多かった梅と違って、桜は本

来山のもの。(全評釈)

○人もすさめぬ

・「すさ・む」(マ行・下二)

① 心のおもむくままにことをすすめる。もてあそぶ。慰みにする。心にとめて愛する。(用例 当該歌)〔日本国語大辞典〕

・「すさむ」とは心にとどめて愛すること。↓八九二 (新全集)

・「人」は広い意のもので、下の「我」に対させてある。「も」は詠嘆。「すさめ」は賞翫の意。(評釈)

・「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」(雑上・八九二)の「すさめず」は「馬も喜んで食べようとしなしいし、刈る人もいない」の意であり、この「山たかみく」と似たところのある「谷寒みいまだ巢だたぬ鶯の鳴く声若み人のすさめぬ」

『後撰集』春上・三四)は、「鶯の鳴く声はまだ若過ぎて未熟であるために、人も素晴らしいものとして鑑賞することをしない」と言っているのであって、要するに「すさめぬ」は「喜んで賞玩しない」ということなのである。(全評釈)

○桜花

・桜の花に対する呼びかけ。(全評釈)

○いたくなわびそ

・そんなにひどく悲観してくれるな。(新全集)

・はなはだしくはわびしがるな。(評釈)

・禁止を表す「な―そ」の形。「わぶ」は「苦しく思う」「つらいと思う」の意。(全評釈)

○みはやさむ

・「はやす」は「栄ゆ」の他動の形で、栄えある(物事が盛んである)ようにすること。引き立てる。(新全集)

・「はやす」は賞美する、めでるの意。(新大系)

・「みはやす」は一つの詞。「はやす」は栄えあらしめる意で、賞翫というに当たる。(評釈)

・楽しく褒めたたえよう。(全評釈)

○里遠み

・「里遠み」は異伝。(新大系)

・「山ざくら」とあるので、「里が山から遠いので」の意となる。(全評釈)

【通釈】

題しらず

よみ人しらず

あまりに山が高いので、人がめでもこともない桜の花よ、そんなに悲しまないでくれ。私が見てほめたてよう。

【鑑賞】

○「桜」の歌群

古今集における「桜」の歌群は、「桜」という語が用いられているものに限っても実に四十一首になる。

そしてそのうちの二十一首に「散る」という語が用いられ、また三首に「うつろふ」という語が用いられており、「桜」には「散る」ということがテーマとして深くかかわっていることが分かる。

それを踏まえると、桜歌群の冒頭を飾る四九番歌は、初めて咲いた桜に散ることを知らないでいてほしいという内容で、「散る」という「桜」のテーマが「散ってほしくない」という気持ちから発するものであったことを示し、桜歌群の冒頭にふさわしいといえる。

○配列

梅の歌群から桜の歌群へと切り替わるため、四八番歌からのつながりは薄いですが、四八、四九に共通して見られるのは「花」に対して詠み人の願いを伝えているということである。そして四九、五〇は共に桜を擬人化し語りかけている歌であり、こちらも語や句というよりは内容的なつながりを意識したものと考えられる。

五〇から次の五一にかけては、「山」の桜ということ、語のつながりがみられる。

参考文献

- ・『新編日本古典文学全集』小学館
- ・『新日本古典文学大系』岩波書店
- ・『古今和歌集評釈』上巻 東京堂出版
- ・『古今和歌集全評釈』上巻 講談社